

専門職からみた子育て支援

— チームとしての総合的支援の在り方の検討 —

Childcare support from a professional perspective

— Consideration of the state of the overall support as a team —

立花 恭子* 立本 千寿子**
三宅 一郎***

(令和2年1月29日受理)

要約

本研究は、大学附属幼稚園の2年間の「ひよこクラブ」において、幼稚園教諭だけでなく、保護者・子どもと養護教諭・栄養教諭の関わりを明らかにし、子育て支援において、どのように生かしていけるかを考察していくことを目的とした。

方法は、H大学附属K幼稚園の子育て支援「ひよこクラブ」の2年間の実践を通じた参加型観察記録による事例分析と質問調査であり、支援員の育ち（幼稚園教諭・養護教諭・栄養教諭）に着目し、実践の過程を明らかにした。

結果として、①発見・気づき②成長点③専門職としての支援④チームとしての4つの視点を総合的支援の在り方が抽出できた。

以上の結果は、先行研究で示されてきた専門職としての在り方と合致する。さらに今後の「ひよこクラブ」にとっての子育て支援は、専門職としての知識を高めるだけでなく、親子と共に互いの人間性の成長を含めた関わりが重要であることを提案する。

キーワード：子育て支援、養護教諭・栄養教諭、専門職の関わり

keywords：Child-rearing assistance, nursing teacher・nutrition teacher, professional involvement

I. 問題と目的

本稿は、子育て支援を考えるにあたり、以下の先行研究の考え方を主軸とする。大豆生田(2006)¹⁾は、「重要な専門性は乳幼児の寄り添い、共感的・応答的にかかわる中で個々の子どもの特性を理解し、信頼関係を形成したり、子どもが主体的に遊びを始めることをゆっくりと支援することにある。」「子どもへの直接支援というだけでなく、保護者に対する子どもへのかかわり方のモデルを提供する子育て支援者の重要な専門性となり得ると考えられる。」と主張しているものである。この大豆生田の主張は、本研究の実践において達成できているかを確認する上での重要な視点

である。

また、先行研究において川村(2008)²⁾は、子育て支援は、未就園児だけにとどまらず、在園する子ども達を守ること、在園時の母親へのサポートも大切であるとし、①未就園児親子を対象とした子育て支援活動「みみちゃんクラブ」、②在園時を対象とした子育て支援、③在園時親子を対象とした子育て支援、の実践を報告している。それぞれの実践の成果を述べつつ、子育ては社会全体が担うべき仕事と捉え、必要な社会的支援と介入を行う方向への転換が必要だと指摘している。また、子育て支援の時間的拡大・質的拡大が課題であるとし、あわせて、保育者自らが子育て支援に

(*たちばなきょうこ 附属加古川幼稚園元主任教諭 幼児教育)
(**たてもとちずこ こども福祉学科准教授 保育内容(表現))
(***みやけいちろう 保育科教授 運動発達学)

関する専門性を獲得していくことが求められるとされている。

北川・佐藤(2009)³⁾は、就実教育実践研究センターが実施する子育て支援事業の現状と、子育て支援スタッフの要請教育の課題を報告している。子育て支援は、単独ではなく、様々な機関や多様な人々との連携の上になされるべきであり、様々な他の社会資源や組織と連携して、対象となる母親たちのニーズを感知しつつ、そして母親自身の自己解決能力を信じ寄り添いながら取り組んでいく貢献から協働への発想の転換を述べている。高畑ら⁴⁾(2018)は、0・1・2歳児の主体的な遊びの変容と親の関わりを、エピソードを通し明らかにすることを目的とし、親の関わりは、子どもが自分のしたい遊びに没頭する様子を見ることで変化するとしている。子育て支援ルームの支援者の重要な役割は、母親が子どもの遊びを面白いと思い、その遊びの意味に気づくことができるよう、親子の遊びを見守り、ポジティブな言葉かけや具体的な記録を通して、母親の気づきを促すことであると報告している。子育て支援に携わる支援員としての関わり、専門性を述べている。

支援員の専門性について、香崎(2016)⁵⁾は、「①子どもに関する知識②保護者との関係③他との連携④保育者との資質向上である」と述べている。また、島田(2009)⁶⁾も、「知識や技能の習得はもとより、豊かな人間性が問われている」と述べている。三井(2010)⁷⁾は、「気軽に聞ける、話せることの安心感を抱ける場をスタッフによって創造することが、人の社会性を回復し、親同士が支え合う『関係性を構築する主体者』になることにつながっている。スタッフの親への関わり方が基盤となって他の親同士の関係に発展する」と述べている。

このように、支援員は、子どもと親(保護者)の双方を支援し、親同士の関係の支援まで求められる。さらに、支援員に対しては、資質向上、豊かな人間性、関係性を構築する主体性を求めている。支援員が実践する中で、親に発達段階を知らせ子どもの気づきや成長を発信し、子どもだけが育つだけでなく、親自身も育ち、支援員も育ち、

何より支援員の実践力だけでなく、人としての育ちが大切であると思われる。

そこで本研究では、H大学附属K幼稚園の子育て支援「ひよこクラブ」の2年間の実践を振り返ることを通して、支援員の育ち(養護教諭・栄養教諭)に着目し、実践の過程を明らかにしていく。さらに、その成果について考察を深めていくことを目的とする。また、支援員の専門性の今後の方向性や課題を明らかにしていく。

II. 研究の方法

1. 研究対象

H大学附属K幼稚園での親子登園の形態による未就園児「ひよこクラブ」の子育て支援活動に関わっていた養護教諭、栄養教諭

2. 研究方法

参加型観察記録及び質問紙調査で行う。

具体的には養護教諭、栄養教諭が「ひよこクラブ」に関わった支援員として発見や成長点を明らかにする。また、参加型観察記録による事例を考察し支援員の専門性と関わりについて検証する。

具合的な方法としては、参加型観察記録に関しては、事例から子どもや保護者の様子・言葉を拾い上げ、支援員がどのように関わったのかについて、分析を行う。

次に、質問紙調査に関しては、自由記述によって回答を求め、実践開始時及び実践最終時の実施により、支援員としての成長ならびに実践を通じた課題の変化について分析を行う。

3. 研究期間

2015年4月～2017年3月の2年間

III. 結果

1. 支援員の専門性と関わり

以下に、支援員の育ちについてエピソードを記し、その後に考察する。なお、支援員は3名(幼稚園教諭、養護教諭、栄養教諭)から構成されるが、ここでは、養護教諭、栄養教諭に着目し、「ひ

よこクラブ」での実践におけるエピソード記録とアンケートから、支援員の関わりについて分析する。

2. 支援員による実践

(1) 養護教諭による実践

①事例

12月19日（月） 天候：晴れ
「おてて ピカピカ」

(背景)

胃腸炎が流行っていると聞き、感染症が流行る時期でもあった。手洗いからの感染が多い。手を介して起こる感染がほとんどなので、正しい手洗いは多くの感染症や病気などの予防に一番効果的であるということを伝える。遊戯室でボードに、手とばい菌の制作物を掲示し見やすいように工夫した。

(エピソード)

ボードに掲示している絵を見せ「これはみんなの手と同じです。」「みんなのおてて見て。」と言うと、自分の手を見たり見せてくれた。「きれいかな。きれい。」と言うと、うなづいていた。支援員が実際に手洗いの方法を見せながら話を進めると、保護者も子どもの手を持っていった。手の甲を洗う時「こうするんだよ。」と支援員の手動きを見ながら子どもの左手の甲の上に右手の手を平を重ねていた。途中ばい菌をもって「ばい菌がからだに入って、お腹が痛くなるよ。」と話しはじめると、遊んでいた子ども手を止め、じっと見ていた様子が印象的だった。また、遊びながらも、手洗いのまねをしていた。

次の活動がおやつ時間なので、支援員が「ひよこさん、なにしているとき手洗いです。」と、聞くと「おやつ」と答えてくれた。「今日の手洗いしようね。」と言うと、「はい」と返事をして、お母さんも「がんばってしようね。」と声かけをしていた。



②保護者の感想

本研究は、実践研究であるため、生きた保護者の声をありのままに記載することで、より実践の視点に立った分析に繋がると同時に、各専門家の実践と照らし合わせながら、親の思いに寄り添う姿勢を重視する観点から、保護者の記載した回答をそのまま掲載する。

- ・嘔吐物の処理のやり方を知り、勉強になりました。
- ・消毒に困っていたので、アイロンや消毒液の作り方など、家でもできる対策を教えてください実践していきたいと思います。
- ・インフルエンザや胃腸炎の流行は、本当によく耳にするので手洗い、うがいを徹底したいと思います。
- ・本当に胃腸炎が流行していると聞くので、感染予防の方法や対処法などが聞けてよかったで

す。

- ・水分補給で、喉をこまめにうるおす事も予防につながる事を知り良かったが、上の子が寒い時期は、ほとんど水筒のお茶が減っていないのでこまめに飲むと、風邪にかかりにくい事を話そうと思います。
- ・手洗いの正しい方法が分かってよかったです。
- ・先生の話がとてもわかりやすく、子どもと一緒にしっかり手洗いしないと！！と思いました。毎年冬には兄弟で胃腸風邪にかかるので、しっかり手洗い・うがいをがんばりたいです。
- ・興味をもって話を聞いていました。
- ・子どもと一緒に聞いた、とても分かりやすかった。
- ・為になるお話でしたが、子どもは全然聴いていませんでした。
- ・子どもにもわかりやすいお話で、問いかける言葉がとても伝わってきました。今日のお話で、子どもも楽しんで手洗いが一緒にできたとします。
- ・子どもと母親が胃腸炎になったので、またかからないように今日から手洗いしっかりとして予防していきたいと思います。
- ・手洗い・うがいなどの基本的な習慣が健康な毎日をおくる上で大切なことだと改めて思いました。

○今後、安全の日のお話の希望について

- ・風邪をひきにくくなるような食事の方法を知りたいです。
- ・そのシーズンに流行する感染症の対策など。
- ・ケガの処置
- ・ケガの予防（ケガしないために良い体操など）
- ・震災の時の避難や、準備におきたいもの等
- ・子どもの手足の感想が冬になるとひどくなるので、予防法や効果的な薬（市販のクリームなど）を教えてもらいたい。果物嫌いを克服する方法。
- ・横断歩道の渡り方。
- ・信号の話
- ・ストーブや暖房器具を出すので、急に火傷した

時どのように対応したらよいのか、教えてほしいです。

- ・道路を渡るときに右左と、見ることとか注意することのお話が聞きたい。
- ・家の周りの道路やスーパーの駐車場、交差点、踏み切りなど手をつないで通っていますが、絵を交えたりして危険な場所を、子どもにも分かりやすいように勉強したいです。
- ・子どもも一緒に聞いて、楽しそうでした。一生懸命聞いていました。

③考察

子どもたちが理解できるように、制作物を作ったことで、子どもたちも興味を示してくれた。また、日常的に手洗いをしているのでより興味がもてたと思われる。子どもたちもお話がよく聞けるようになっていたので、ゆっくり落ち着いて話が進められた。保護者も支援員の話にそって、一つ一つ一緒に教えてもらいながらできていたので、ほとんどの子どもが手洗いの方法を理解できていた。保護者の協力が子どもにとってとても大切なことであると思われる。保護者からも「感染予防の方法や対処法などが聞いてよかったです。」「子どもと一緒に聞け、とてもわかりやすかった。」という声が聞けた。話の内容が日常的であり、実際におやつ時間の手洗いも確認できる場がもてたことは、とても良いと思った。保護者に身体のこと、病気のことなど質問があっても答えることができるよう専門的知識を高めておく必要があると思った。

(2) 栄養教諭による実践

①事例

2月22日（月） 天候：晴れ
「どうぞ こうするのよ」

(背景)

家庭では、親子で一緒にクッキングしたいという思いはあるのだが、時間が取れなかったり母親だけでしてしまう事が多いという声が聞かれ、「ふれあいクッキング」を設けた。

栄養教諭が中心となり、「ひよこクラブ」と交流のある年長児の卒園祝いの催しで、親子と一緒にサンドイッチと3色寒天ゼリー作りを行った。場所は遊戯室で、参加親子は16組、年長児は25名であった。

(エピソード)

年長児が遊戯室に入って来ると、お兄ちゃん、お姉ちゃんと「ひよこクラブ」の子どもたちは笑顔で出迎えていた。それから、年長児と「ひよこクラブ」の親子と合同で7つのテーブルに分かれ、調理が始まった。

年長児は同じテーブルの来園児G児に「持ち方、こうやるんだよ」「あぶないよ」と包丁の持ち方などを伝える姿や、G児が頑張っていると「じょうずやね」と声をかけ褒める姿が見られ、G児も一生懸命に取り組もうとしていた。また、母親もG児に「お兄ちゃんのを見てみ」と声をかけ教えようとし、材料を分けるときには母親が、年長児に優しく「どうぞ」「こうするのよ」と年長児がやりやすいように言葉かけをしていた。さらに、デザート作りでは、牛乳寒天を入れ、キウイを混ぜ合わせるときには、自然に母親がボールを抑える役を引き受け、「はい」と声をかけ、ボールを子どもたちが順番にぐるぐると回せるよう工夫していた。

るときにドキドキしましたが、これからは家でもやってみようと思いました。

- ・小さい子には少し行程が長く、待っているのが難しく感じました。もう少し短い方がやりやすいのではないかと思います。
- ・びっくりするほど食べてくれました。うちでもやってみようと思います。
- ・子どもたちと一緒にクッキングをすることがとても楽しかったです。
- ・子どもとお料理をするのは、いろいろエネルギーを使いますが、食事はみんながわきあいあいと作り、食べる楽しみを味わえてよかったです。
- ・子どもたちと一緒に何かを作って楽しかったです。
- ・子どもたちが、とても楽しくお料理をすることができました。
- ・家ではあまり包丁を持たせないで、すごく喜んでいました。でも、気になるのかずっと包丁を触っていて危なかったです。
- ・楽しかったです。
- ・クッキングに興味があるので、すごく楽しかったです。又、5歳児の子どもたちともいろいろお話ができてよかったです。
- ・パンが甘かったり、寒天の見た目が崩れていたりで食べはしなかったけれど、ナイフで切ったりお玉で牛乳を流したり、お料理の体験は楽しかった様です。
- ・また家で、サンドイッチとゼリーを作ってみようと思いました。
- ・5歳児と一緒にクッキングをして、楽しかったです。パンが甘かったです。
- ・サンドイッチを作るとなると材料を揃えたり、準備など大変で、さらに一緒に作るとなるとなかなかできないので、こういう機会にできて楽しかったです。
- ・失敗もしながら、それでも楽しく食事の支度や、食事ができてよかったです。
- ・家では忙しく、なかなか一緒に料理をすることができなかったのも、とても楽しい時間でした。
- ・楽しくてよかった。自分で作ることで、食材に

②保護者の感想

- ・とても楽しかったです。好き嫌いも多いので、食育としてとても良いと思います。
- ・包丁を使ったことがなかったので、キウイを切

興味がわいたと思う。

- 今後、親子クッキング・食育に関する希望
- ・またやりたいです。今度は違うメニューでやってみたいです。
 - ・また親子クッキングをしたいと思います。
 - ・一緒に作って食べるのは、とても楽しいので、またお願いしたいと思います。ありがとうございました。
 - ・簡単で一緒にできそうなものを、またぜひ教えてください。
 - ・食事を取ることの大切さを、子どもたちにも教えてもらえると嬉しいです。
 - ・おにぎりを、にぎったりする親子クッキングもしてほしいです。
 - ・何でもやってみるといいかと思います。いい経験になるのではないかと。
 - ・好き嫌いがあるのですが、今日キャベツをはじめ食べていたので、みんなでクッキングする大切さがわかりました！
 - ・家ではお料理のお手伝いをさせてあげられないので、どのような形でも親子クッキングができると嬉しいです。
 - ・今回や前回のように、簡単に楽しみながらできる物がいいです。
 - ・子どもと一緒にできる簡単なクッキングをまたしたいです。
 - ・お菓子もたまにはおいしいけど、ごはんを食べる大切さを教えていただけたらと思います。おやつは食べるけど、ごはんを残すことがあるので。
 - ・手軽に家でも、できるものをまたしたいです。
 - ・子どもの1回に食べる適量を知りたいです。

③考察

筆者、5歳児担任、栄養教諭、養護教諭と打ち合わせを行い、子ども中心だけでなく、親子で楽しめること、異年齢の関わりが深められる内容をいろいろと考えた。そこで、それぞれの立場から協力的に話し合いが進められ上記の計画に至った。母親が自分の子どもも年長児も一緒に言葉をか

け、タイミングよく手伝いや助け合いをする姿が見られた。実践の様子からできるだけ母親がしてしまわず、子どもたちにまかせて待つことができている。家庭で行う一対一のクッキングではなく、幼稚園でクッキングをすることに意味があるのではないかと。年長児の姿が我が子のモデルになったことで母親にとっても子ども同士にとっても良い効果となり、お互い刺激し合える場につながったのではないかと考えられる。支援員として、家庭ではできないクッキングを活動内容の中に組み入れ、積極的に参加できるようにしていきたいと考える。



(3) 支援員の変化

①支援員における変化

今回対象とした2名の支援員は2015年から「ひよこクラブ」の担当となり、それまで子育て支援に加わったことがなかった。また、それぞれが養護と栄養を専門としていることから、子どもと接

することはあっても、親子とのふれあいについてはほとんど経験がない状態からのスタートであった。そこで、支援員として活動を行う立場となり、どのような変化があったのかを見ていく。質問内容は、昨年と比べて子どもへの見方で異なる点、昨年と比べて親への見方で異なる点、自分自身が

学び・成長したと思う点、これからの課題である。

なお、本項では、養護教諭・栄養教諭の2回にわたる質問紙調査の回答の結果から、「成長点」や「課題」をみていくが、成長点の妥当性としては、経月における専門職本人の気づきの視点に拠るものとする。

②発見・気づきの妥当性について

○昨年と比べて子どもへの見方で異なる点

	1回目 (2016年6月)	2回目 (2017年3月)
養護教諭	関わりが多いことから、早く全員の子どもの名前を覚え信頼関係を築きたいと言う気持ちである。また、どんな事に興味があるのか子どもの発達段階を知り、学ぼうとする姿勢である。	発達段階を少し理解した上で接することが出来たと感じる。そのことから、一つの遊びや同じ動作でも年齢によって興味関心が大きく異なることを感じた。
栄養教諭	「ひよこクラブ」の支援として全体を見ることはあっても、それぞれの子どもと関わることをあまりできていなかったように思う。しかし、今年度からは昨年度から来ている子を対象に行動や発言などの様子を記録することを始めた。それによって、1つ1つの子どもの行動を丁寧に見るようになった。そうすることで、それぞれ子どもの育ちや考えを自分の頭で考えるようになり、“この子のこの行動はどういう意味があるのだろう”、“どうしてこんなことを言ったのだろう”、と疑問を持ちながら関わっていくようになった。	「ひよこクラブ」で子どもの様子を観察してみると、だんだんと子どもの細かな動きや表情、友だちとの関わり方を見たり、聞いたり、この先はこうなるかもしれないと予想したり、昔との変化したところを発見したりと子どもの成長を感じながら、活動を見られるようになった。それによって子どもの行動や発言には理由があるのだなと思いつつ、子どもの行動や感情の表現を理解できるようになってきたのではないかなと思う。

○昨年と比べて親への見方で異なる点 (1回目 2016年6月)

	1回目 (2016年6月)	2回目 (2017年3月)
養護教諭	昨年よりも関わらせていただく機会が多いので、挨拶だけでなく、お子さまの様子などを、プラス一言話せるようにしたいという気持ちである。	あいさつをしたり、お子様の様子など一言、二言話をしていき積極的に声掛けを自分から行うこと。
栄養教諭	子どもに対する見方が昨年度と変わったように、その子どもを育てる親のことも考えて支援していく大切さを感じるようになった。以前教えていただいた「親も子どもを産んだときが子育ての0歳である」という言葉が印象に残っている。子育て支援において親の考えや悩みに寄り添い、子どもの成長だけではなく親の成長の手助けをすることが大事なのだという意識ができてきた。	子どもの行動に疑問を感じたり、普段の子どもの生活や成長を感じることを保護者に伝えるコミュニケーションが大切だと感じる。保護者との会話から発見があったり、自分の知らない子どもの姿が見えることもあるものだなと思う。

○自分自身が学び・成長したと思う点

回答者	〈1回目 2016年6月〉	〈2回目 2017年3月〉
養護教諭	子どもはどんなことにも興味があり、いつでも成長するきっかけがあるということを実感し、学んだ。できた時などに、ほめてもらえたり気持ちを受容することは、今後いろんなことに取り組む意欲につながると思う。私は、先に「危ない」と言ってしまうので、保護者の方々みたいに、子どもの気持ちに寄り添い受け入れるという姿勢を大切にしたい。	常に「だめよ」と注意する親もいて、親の言葉かけ一つで子どもの様子に大きく影響する事が学べた。また、子どもの気持ちを受け入れる事の大切さを強く感じた。このことから、注意するのではなく、少し行動を見守ることが昨年より心掛けられるようになったと感じる。
栄養教諭	子どもや親の見方を変えてみるようになって、まだ数回ではあるが今まで知らなかった子育ての深さを学ぶことができて、良い経験をさせてもらっている。子どもや親にも個性があり、家庭での生活や育ち、いろいろな観点で見て気付きを多くする必要性を感じるようになった。しかし、まだ自分自身成長しているとは言い難く、子どもや親、子育てや保育について理解ができていない部分が多々ある。	子どもの言葉や行動に対し、純粹にやろうとする行動を認めて、見ているだけでなく、手助けをすることが多かったが、余裕のあるときは見守ったり教えてできるところまでやって、褒めてから手助けをするなど子どもの状況に応じて対応するようになったと思う。また、遊ぶのが大好きな子どもたちを見たり、製作に取り組んだり、夢中になってじーっと絵本を見て聞いたりしているのを一緒にさせてもらったとき、「ひよこクラブ」の活動を通して、親子が楽しくて、興味がわく活動になることはどんなことだろうかと考え、また、食育にどう生かすことができるかなと考えようになった。

○これからの課題

回答者	〈1回目 2016年6月〉	〈2回目 2017年3月〉
養護教諭	支援員としてどのような補助や関わりが必要なのか課題である。保護者のニーズや今抱えている健康面での手助けが行えるよう日々学んでいきたい。また、何かさせて頂ける機会があった際には、子どもの興味をもってもらえるような準備や、保護者も楽しめる内容を考えることや、子どもの気持ちに寄り添うことも課題である。	健康面で質問をしてくださることがあったため、しっかり答えられるよう日々勉強して知識を深めていきたい。また、最新の情報（感染症など）なども学んでおきたい。専門性の向上や、支援員としてどのような補助や関わりが必要なのか、子どもの気持ちに寄り添うことも課題である。
栄養教諭	「ひよこクラブ」での活動は親子で参加されるため、子どもに対する関わりだけでなく、親子ともに関わっていきながら、いろんな子どもの姿や親の考えを知り、自分の見聞を広くできるようにしていきたい。また、自分の専門分野である食について家庭に繋げられる指導ができるように“分かりやすく身近に感じる教育”ができるようになりたい。	自分の専門である食育で関わっていきたいが、子どもの成長や環境、状況に合わせて学びを提供できたらと思う。身近にある自然を生かして植物に触れ合ったり、普段何気なく食べている食に興味を持ってもらえるように話をしたりなど幼稚園だからこそできる食育をできたらと思う。

③考察

1. 質問紙の回答から、①発見・気づき②成長点③専門職としての支援④チームとして総合的支援の4つの視点を抽出することでできた。「ひよこクラブ」においては、専門的な養護教諭と栄養教諭が関わっている。二人にアンケートを6月と3月に行うことで、自分自身の発見、関わ

り方の変化、専門職としての学びや成長、今後チームとしてどう支援していく事が必要であるのが見えてきた。6月の共通点として子どもの見方の発見・気づきは、「この子のこの行動はどういう意味があるのか」「どんなことに興味があるのか」と、疑問を持ちながら知ろうとしたり学ぼうとしたりしたことである。親に対し

ての関わりが変わってきた点は、親と関わる機会を自分でつくり、子どもの様子など話せるようにしたいと前向きになった点である。学びや成長点は、いろいろな観点で子どもの気づきを大切に、子どもの気持ちに寄り添い受け入れる姿勢が必要であるということが見えた点である。今後の課題としては、子どもに対する関わりだけでなく親子共に関わっていきながら、いろいろな子どもの姿や親の考えを知り学んでいきたいという点である。

3月の共通点として子どもの見方の発見・気づきは、子どもの行動や感情の表現など発達段階を理解した上で接することができた点である。親に対しての関わり方が変わってきた点は、保護者に対して、積極的に声掛けを行いコミュニケーションの大切さであることを感じたことだ。学びや成長点は、子どもを見守ったり子どもの状況に応じて対応するようになった点が挙げられる。今後の課題として、どのような手助けや関わりが必要なのか、子どもの成長や環境、状況に合わせて、学びを提供していきたいという考えが見えてきた。

また、専門職としての支援の考え方として、養護教諭は、子どもの気持ちを受け入れ、子どもの気持ちに寄り添うことの大切さを強く感じていた。子どもは、どんなことにも興味がありいつでも成長するきっかけがあるということを実感していた。栄養教諭は、今までいつも同じような見方で子どもを見ていたが、自分自身の見方を変えて、いろいろな子どもの姿を見ることの大切さを感じるようになった。友だち同士、教諭、保護者、異年齢との関わりを大切にしていきたいと述べた。

以上のことから、共に学び合う・育ちあう空間として、常に生き生きとした育ち合いが展開されることや、子育て支援の創造が求められると考察する。天野(2013)⁸⁾は、「保護者の主訴の把握・確認、問題の経過の把握、アセスメント【事前評価】、インターベンション【対応・介入】、応答の技術、記録と振り返り、保育現場が地域の未来をつくる拠点となること、子どもとともに

に未来を紡ぎ出す保育者が、保育の専門性を発揮しながら地域社会に貢献していくことが強く期待される」と述べている。また、鯨岡(2000)⁹⁾は、「子ども一人一人の気持ちに寄り添い、その気持ちを抱えたり支えたりすることを基調に対応しようという姿勢です。その懐深い対応の繰り返しが子どもの保育者への信頼関係を育み、保育者の頼みに自分の気持ちを譲歩できるようになったり、次第に社会化された行動がとれるようになっていくのだと思います。」と述べている。

それぞれの専門性を生かし、幼稚園教諭、養護教諭、栄養教諭がチームとして総合的に親子にかかわることが重要であり、参加の喜びが味わえる場を提供し満足感が味わえるように支援していくことが必要であると推察する。

2. 総合考察及び今後の課題について

本研究では、子育て支援の実践の過程において、支援員の関わりに着目し幼稚園教諭、養護教諭、栄養教諭の三人で毎回振り返り、情報や知識を交換することで取り組んできた。

その結果、参加型観察記録、質問紙調査により反省点や共通点に気づき、経験を積み上げることで次への関わり方に変化が見えてきた。

しかし本研究では、保護者や子どものニーズにできるだけ寄り添い、コミュニケーションを大切に心掛けてきたが、親子と理解し合い、今抱えている悩みや専門的分野の支援が不十分だったのではないかと推察する。

今後、積極的に専門職のプログラムを取り入れていくことも必要であると思われる。子育て支援に関わる者として、専門性のみならず人間性を含めた成長が重要であると考えられる。北野(2008)¹⁰⁾は、「子ども、保護者、そしてそれを支援する人びとが、それぞれ主体的に関わり、共に成長することのできる環境こそが、保育や子育てにおいて重要であることだと考える。保育や子育てに関わる人と人のつながりのあり方の改善こそが重要である。子どもや親を対象とした支援、教育、研究ではなく、共同作業として子どもと親そして社会が

共に取り組むこと、この重要性が明らかにされている。またその関係性は、子どもにとって居心地のよい、受け入れられていると感じることのできる肯定的な環境である。」としている。

また、本研究では、幼稚園における子育て支援を運営する専門家の実践過程を分析しながら、専門家として求められる資質・能力や在り方を検討してきたが、実際の親子との出会いは、様々な理論を超えたような人間くさい日々の営みである。このことは、子育て支援の理想論とは異なる視点にはなるが、実践する者としては支援の根底ともなる重要な資質・能力であろう。北野(2008)は、上記の文献の中で、「人の働きこそが重要である。子育て支援に関わる人の成長こそが望まれる。子育て支援が子ども、保護者、支援者が主体的に関わる。それぞれの人間関係形成能力をはぐくむ営みとなるように、建物や郊外の公園づくりではなく、人への施策、子育て支援、子育て支援の主体の成長を促す、人の充実とその人の教育の充実」を述べている。また、幼児教育の祖とも呼ばれる倉橋(2005)¹¹⁾も、「子どもは心もちに生きている。その心もちを汲んでくれる人、その心もちに触れてくれる人だけが、子どもにとって、有り難い人、うれしい人である。」としている。すなわち、人間性を高めることを含めた専門職としての関わり方を学ぶ重要な職域であると考えられる。今回は、幼稚園教諭に加え、養護教諭と栄養教諭という専門家に焦点を当てて述べてきたが、今後は、より専門的な観点から検討することで、新たな子育て支援の可能性を広げることにつながる。この点は、佐伯(2008)¹²⁾の「保育者の専門性の根幹には「共感的知性」があり、多様な他者(子ども、同僚、保護者、研究者・・・)に自分が開かれているかが問われるのです。」という視点を参考にしたい。

今後、附属学校としての繋がりを活かし、幼稚園教諭・養護教諭・栄養教諭のチームを強化していくことのみならず、大学教員との連携・実践をも展開していきたい。さらに、子育て支援に関わる専門家と「ひよこクラブ」に参加する親子がと

共に貢献したいと考える。

〈引用文献〉

- 1) 大豆生田啓友『支え合い、育ち合いの子育て支援』、2006、関東学院大学出版会、p.13) 香崎智郁代「子育て支援員」に求められる力量に関する一考察、2006、pp.20-21
- 2) 川村弘子「保護者の願いに添う幼稚園教育を求めて」一附属幼稚園としての子育て支援の在り方—『岐阜聖徳学園大学教育研究センター紀要8』2008、岐阜聖徳学園大学、pp.91-103
- 3) 北川歳昭・佐藤和順「就実教育実践研究センターと子育て支援—私立大学附属機関による地域子育て支援事業モデル—」『就実教育実践研究』第2巻、2009、就実短期大学、pp.95-113
- 4) 高畑芳美・名須川知子・磯野久美子「0・1・2歳児の主体的な遊びの変容と親の関わり—子育て支援ルームにおける親子の遊びのエピソード分析から—」『保育学研究第56巻第3号』、2018、日本保育学会、pp.161-173
- 5) 香崎智郁代「子育て支援員」に求められる力量に関する一考察『VISIO36』、2016、pp.20-21
- 6) 島田ミチコ「これから保育士に期待される専門性について」『教育学論究』、2009、p.46
- 7) 三井登「地域子育て支援センターの意義と課題—支援者による利用者との関係性の構築を中心に—」『大谷短期大学紀要第47号』、2010、p.25
- 8) 天野珠路「地域の子育て支援・保護者支援の専門性—地域の未来をつくる」、『発達134』、2013、ミネルヴァ書房、pp.34-39
- 9) 森上史郎・松平信久・安藤節子・岸井慶子・吉村真理子・立川多恵子・後藤節美・佐伯胖・秋田喜代美・鯨岡峻・津守真『発達』、2000、ミネルヴァ書房、p.60
- 10) 北野幸子・立石宏明『子育て支援のすすめ—施設・家庭・地域を結ぶ—』、2008、ミネルヴァ書房、p.221-222
- 11) 倉橋惣三『育ての心(上)』、2005、フレーベル館、p.30
- 12) 佐伯胖『共感—育ち合う保育のなかで—』、2008、ミネルヴァ書房、p.153